

ダンサー達を挑発し、自己と向き合わせる『豊半豊』という場所。

豊半豊 其七 神楽坂 die pratzte

豊半豊其七は、高円寺無力無善寺、神楽坂 die pratzte という空気も性質も異なる二つの会場で行われた。この三日間の公演は、企画者中西の意図は定かでないが、これまでの豊半豊の軌跡を辿っているとも言えるだろうし、近年の若手ダンサーの動向を表しているとも見える。

6月10日無善寺は、木槍朱実以外は豊半豊出演経験者だった。秦真紀子の肉体が痙攣する作用を、相

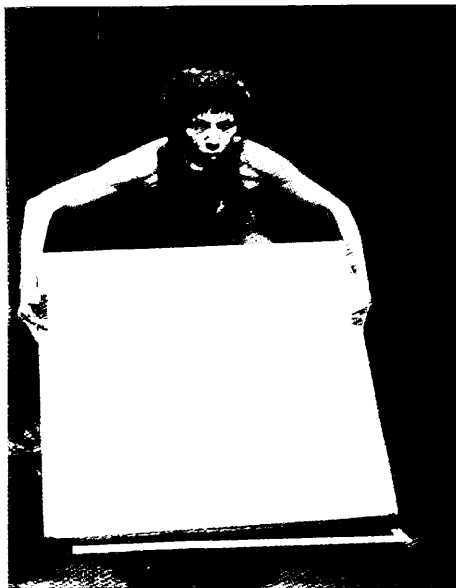
良ゆみが引き出した。相良はリードが向いている。富岡千幸は私服と能着で公演する際の違いを強調してきたが、今回これが混在した。摺足と声で会場を異化するの流石だった。スズキユウコは従来の黒の衣装から赤に転じた。凶暴と狂気と女性性を、区別して提示する。野出春子は姉妹陽子と共演し、これまでの作品を更に作りこんだ。声が呪文のように反復する。大倉魔矢子の足は鍛え抜かれていた。肉が瓦礫のように崩壊する錯覚を与えた。木槍のボ

ーズには一つ一つ音楽が発している。特にその手の形に、音程の狂いは絶対に生じない。大倉と木槍は、大きなホールで公演を行っているようにもみえた。

6月12日 die pratzte の出演者は、小川真帆を除き全て豊半豊初登場であった。川上暁子と共演した小川は、緊張感を保つ成長を遂げていた。相良+秦の公演と被るように感じても、女性性のベクトルの向き方と身体にたいする感覚に違いがある。伊藤虹は、豊/無善寺/die pratzte という「場所」を問題とせず、「空間」と戦った。それは音楽との戦いでもあった。かといって、この公演がどこでも出来るのではない。ここだから成立したのだった。中村公美は、白らの体を劇場と化した。豊に対して手の指で音を発生させるという接触を起こし、豊の縁を足の指によって干渉する。この豊との接点を、自己の体に流し込むのだった。籾財大輔+石本華江+籾財和也+白井順也は、炬燵を用いてその中と上で奇術的動作を見せてくれた。今年の1月の die pratzte 主催「新人シリーズ4」で行った公演の延長を感じた。豊ではなくとも成立してしまうからこそ、ここに飛び込んだのかも知れない。

6月13日 die pratzte は、豊半豊の常連でひしめく中、これからの活動が期待されるオドリコと PANCHACHA が初出演した。二者とも、今後は常連に負けない個性をここで発揮して欲しい。村田いづ美は、豊半豊六で消化不良の作品を完結させた。ストイックなまでの動きが村田ファンを失望させたが、ここから村田の良さを見つけなければならない。若尾伊佐子はいつも通りの無音・即興であったが、一方の手で空間に平面的な図を描き、他方で立体的な地を切り裂く新境地を開発した。これからの展開が楽しみだ。武藤容子は、自らの体を正面から観客にぶつけた。豊を剥がし壁に打ち付けるのは冒険ではなく、「場所」としての豊を超越するために必要な「行為」であった。

豊半豊が、3.40代中堅ダンサーの、小奇麗で器用に難なくこなす場所になって欲しくない。初めて来た人に、そう見られてしまうかもしれない。豊半豊はマイナーを標榜しているわけではないだろうが、決して、権威がある大きなフェスティバルに参加するためのステップとしての場ではないだろう。それ程、何れの公演も創り込みすぎていて保守的に映った。だから無善寺と die pratzte の差異が生れなかった。豊半豊という「場所」に殺されないように、必死にもがく危機感 恐れ たじろぎがない。これは、自己が何故踊らざるを得ないかという問題と向き合っていないことをも現している。自らの体を晒すためには、パッションが必要である。パッションの持つ「受難」だけが強調され、「情熱」が忘れられてはいないか。この「情熱」を、私は豊半豊で燃え尽き、焦がれ、灰になるまで出演者と共に体験したいと願っている。
(宮田徹也)



武藤容子



籾財大輔+石本華江+籾財和也+白井順也



村田いづ美



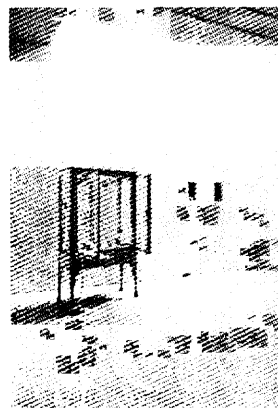
伊藤 虹

INTOWN 白い箱

●6月某日、東京・恵比寿のMA2Gallery (エムエーツと読む) へ行った。5月に出来たばかりのスペースは、ドアは壁の縦半分、自然光がほんとうに自然に差し込む素敵な空間。ドアを開けると、おばあちゃんが横たわっていた。あ、違う。白い三つ編みに束ねられた毛が、白い食器棚から飛び出し、床を這っていた…。だいたい作品は箱に入っている。白や緑の糸、レースなどの布地、おもちゃのような食器などが、まるでおまごごとセットのように詰められている。物たちはきちんと配列されているわけではないが、優しさとおもくもりを感じ取る事が出来る。久しぶりに会った友達のように、そして、こうなりたいと願う自分と重ねて。作家は男性みた

いな名前だけど、女性。作品も見ると、女性が作ったものだ。白い毛のおばあちゃんだけでなく、精気を感じさせる緑の毛の作品もあった。凛として生きている女性の一生を表現しているようだ。それは無駄なものではなく、ごくごくシンプルな素材で、ささやかに女性らしさを出しているということ。とくに女性なら分かってもらえる作品だと思った。(藤田千彩)

勝本みつる展 5月19日～6月17日
MA2GALLERY (東京・恵比寿)
<http://www.ma2gallery.com>



影に潜むものは、矛盾をはらむ引き裂かれた身体となる。

イシダタクヤ「私をついばむ被虐の鳥へ」

8月1日～8月2日 神楽坂 die platze (ダンスがみたい) 8 インターナショナルシリーズ

イシダタクヤは影に潜んでいる。彼は影の中から光の中につかま現れる。神楽坂 die platze の舞台には、じゃまと思われることもありそうなのに昔からずっと立っている1本の柱があり、イシダタクヤはその柱の影にそっとたたずんでいた。隠れているのだらうか? もちろん、隠れているわけではなくて、隠れているふりを見せているので、その一歩下がった場から動き始めることが、彼には大切だったのだと思う。同じ場所での数年前の公演では、劇場の前の道路でいつまでも暴れていて、なかなか舞台に入ってきたこともあった。そのときも、一歩下がった場から始まっていたわけだ。舞台の上で動きが始まるのではなく、外から、あるいは周縁部から始まること、もちろん、そうした趣向はそれほど珍しいものではないが、イシダタクヤの場合には、周縁部に潜んでいたものがつかのま中央の陽の当たる場所に現れているという物語が大切に保持されているように思える。

柱の影でたたずんでいた彼は、ノイズ風の音楽のなかを静かに移動する。その動きは滑らかに凝えていた。震えは、影に潜むものが光の中に入ってきたときの当惑の仕草であり、舞踏の所作でもあり、ざわめく身体だ。滑らかなさは、装われた無意識的な動きであり、マイムの所作でもあり、意味を繕う身体だ。舞踏にしては滑らかで、マイムにしてはぎこちなく、舞踏としては意味が過剰で、マイムとしては意味が散漫。きわどいところで舞踏とマイムを縫い合わせているかにみえる彼の身体は、崖っぷちの綱渡りのように舞台を切り裂きながら見えない血をそっと観客に降り注ぐバラドキシルな身体だ。抒情的な

曲に揺れ動くときでも、嘆き悲しむ聖母のように過剰な情緒をまといつつも、斜めに傾く身体があくまでも冷徹に震えて歪み、震えることで余剰の意味を振り払う。2つの方向に引き裂かれるのか、それとも、2つの方向が融合しているのか。もしかしたら、それはどちらも同じことなのかもしれない、と彼の身体を見て思うてくる。

再びノイズ音に包まれるころにはイシダタクヤは既に異形の生き物になっていた。床に限りなく沈み、上方に取り残された両手はあるはずのない何かを求めてうごめく。始まる頃には柱の影にそっと隠れていたはずの彼は、今ではスポットの光の中に閉じ込められてもがき悲しむ身体となって消え始めていた。そして、斜めから降り注ぐ圧倒的な光の圧力に抗しきれずに彼は影の中に帰って行く、そして……影の中に帰ったのかと思われた彼は再び戻ってきた。今度は黒衣のダンサーとなり、力強い曲に合わせてリズムカルにポーズをとりながら光の中で踊りまくる。あっけにとられるほどストレートなダンスだが、随所にマイムのような滑らかな四肢のさばきも見られる。ハッとさせられたのは、音楽が終わって音が消えてからも同じように踊り続けたときからだ。終わらないのか終われないのか、身体はいつまでも動き続け、滑らかなダンスの動きを雑音のような別方向の動きが切り裂きながら、再び床に座り込み、それでも動き続ける両腕は意味の小間切れをかりうじて保持しているマイムの残滓に分散して消えてゆく……

そこにあらかじめ明確な物語があるわけではなく、即興を主とした彼の動きが、彼自身の身体の内面に、

そしてそれを見る観客の内にも、つかのまの物語をそのつと生みだしていくのだらう。また、何らかの意味ある物語の方向が生まれるとともに、そこから逸脱する過剰なベクトルも増す。このせめぎ合う運動が生まれてくるのを彼は辛抱強く待ちかまえているようだ。そこにこそ、ありもしないものの代理表象ではなく、それ自身が屹立する引き裂かれた身体が生まれてくるのだらう。イシダタクヤのダンス＝舞踏に触れる喜びはそこにあるのかもしれない。

(坂口勝彦/舞台批評)



iside02...撮影/田中英世

「不在」の男の手記が、登場人物の内面を鋭く照らし出す。

reset-N [パンセ]

7月14日～7月19日 下北沢ザ・スナリ

reset-Nは、作・演出の夏井孝裕による重厚な脚本と、ステージデザイン、音響、照明等、スタイリッシュな舞台効果で注目を集める劇団だ。今回上演の「パンセ」は3年前に初演されたもので、今回はその改訂版。そのプレビュー公演を見ることが出来た。物語は警察の遺留品置場からはじまる。見知らぬ女と一緒に謎の死を逃げた編集者。その遺留品である手帳には男が始めようとしていた雑誌「パンセ」の構想が書かれている。一般のメディアからは無視されている、事件の当事者や関係者の怒りや悲しみ、その生の声を集めようとする雑誌の内容。編集部と同僚達はその手記を読んでいくうちに、それまで知らなかった男の内面に徐々に触れて行く。特に手記に書かれている、男と一緒に死んだ謎の女の人物設定が魅力的だ。男が最後に取材していたのは、子供が遊んでいたおもちゃを壊すように、自分を愛してくれる人物を破滅に追い込むことでしかその愛に答えられないという女。非常に複雑な内面がよく描かれており、その告白にはぞっとするようなリアリティがあった。よく知っていると思っていた男が急に「不在」になることで見えてくる隠された側面、そしているのかいないのかすら分からない女が吐露する内面……。日常仕事をし、普通に生活して行く中で突然現れる「死」や「失踪」などの存在の裂け目をきっかけに見えてくる人間の内面に段々と光が当たって行き、観る者はその物語にぐいぐいと引き込まれて行く。男が死んだ後であること、生きていた間も謎の失踪をするということ、つまり「不在」であることはとてもこの物語の重要な点だ。男は雑誌を始めること、女への取材を通して日常の連続性

から離れ、一度消えることによって「考えること」に目覚めてしまうのだ。特に男が失踪し、残された周りの人間がパニックに陥る場面にそれが象徴的に表れている。この恐怖は一人の男が不在になることによって、日常の連続性が断たれることによる不安なのである。日常から離れ「考える」ということ、これは雑誌のタイトルとしても使われている書物を書いた哲学者の思想ともダブって見えてくる。

劇場から飛び出し、実際にあるバーで公演を行ったりと、近作で見られた新しい試みは、今回の作品では見られなかった。それよりも「不在」というテーマや、リーディング公演のように役者がステージのまわりに控えていて、自分の出番になると中央の舞台に出てくるという、出ずっぱりスタイル、ノートには実は何も書かれていなかった……という発見で物語の結末が「こちら側」に返されるラストシーンなど、「演劇」という形式に意識的にこだわったような印象の作品だった。劇団としてはこれより1年間、散開活動になるということもあり、いま一度「演劇」というものを見つめ直すという決意の表れなのかもしれない。しかしあまりにすっきりとまとまっている点に、物足りなさを感じてしまうの

も事実。むしろこれからは洗練から遠ざかるような作品も期待してしまう。脚本や演出、舞台効果といった演劇の基本的なレベルに関して言えば、これほど高い実力を持った劇団もなかなか無いのではないかと。しかし一方で、最近ではことに「演劇」に関しては、あっと驚くような作品、初めて観るような前衛的な作品にもあまりお目にかからない、という不満もある。むしろ、ただ闇雲に新しいことに挑戦することが「前衛」ということではなく、一つの言うべきことを洗練させて行く方向ももちろんあるのだらう。これから散開という「不在」の期間のあとに、どのような方向性の作品を見せてくれるのだらうか。

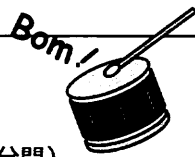
(小笠原幸介)

2点ともreset-N...撮影/相川博昭



子どもたちによる、太鼓を使ったダンスと音楽パフォーマンスの公演が開催。

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.33



NEC×ACTION! 子どもとつくる舞台

「!Baïla Rhythm! ～タイコがおしえてくれた音～」

■公演日時…2006年9月23日(土・祝) 5:00開演(開場は30分間)

■会場…にしすがも創造舎 体育館(東京都豊島区西巣鴨4-9-1 旧朝日中学校)

ワークショップやシンポジウムなどの活動を通じて子どもとアーティストが出会う場作りを提供しているNPO法人芸術家と子どもたちが主催するイベント「ACTION!」。その中でも毎回様々なジャンルのアーティストを迎え、子どもたちとワークショップを重ねた結果出来上がった作品を上演する「子どもとつくる舞台」シリーズは好評の企画である。

昨年度は珍しいキノコ舞踊団の伊藤千枝氏によって、子どもたちの普段の日常をダンスで表現するという楽しい舞台となったが、今回はパーカショニストの石坂玄士氏を迎え、音楽とダンスのワークショップを開催。その成果を舞台作品として上演する。

子どもたちが挑戦する自由な表現に期待である。

今回で5回目を迎える「NEC×ACTION! 子どもとつくる舞台シリーズ」。今回は小学生12人によるタイコを使ったダンスと音楽のパフォーマンス作品となっております。

今回はお迎えしたアーティストは、伝統的な神楽太鼓とフリージャズのパーカッションを学び、現在は日本とメキシコを中心に活躍する、ユニークなパーカショニスト 石坂玄士(いしざか がいし)さん。石坂さんと小学生の子どもたちは、この夏にワークショップを通して、さまざまなダンスや音楽経験を重ねてきました。子どもたちはこのワークショップの成果の発表の場である今回の舞台で、この世界にひとつしかない「音の世界」を創造します。

内容は手作り楽器や、さまざまなタイコを演奏し、タイコにぴったりのダンスを踊ったりと、観ているうちに、ココロもカラダもドキドキワクワクしてくるような大人の方々にも子どもたちにも、楽しんでいただける作品となっております。

約30分の短い作品となりますが、終演後には、アーティスト、出演者の子どもたち、そしてご来場下さった皆様との交流の場として、にしすがも創造舎のテラスから夜空を眺めながらの星空パーティーも催します。

お誘い合わせの上、ご来場いただければ幸いです。

【公演に関するお問合せ】

NPO法人 芸術家と子どもたち 担当:辻/坪井

TEL: 03-5961-5737 FAX: 03-5961-5738

Eメール action@children-art.net

ホームページ <http://www.children-art.net/>

◎創作のプロセスとしてワークショップもご見学いただけます。

【活動日】

■8月28日(月)・29日(火)・9月2日(土)・3日(日)・9日(土)・10日(日)・16日(土)・18日(日)

□9月21日(木)・22日(金)

★9月23日(土)【本番】

【活動時間】

■印の日=9:30～12:30 □印の日=4:30～6:00

★印の日=リハーサル1:00～/本番5:30～

【見学のお申込について】

ワークショップ実施日の2日前までに、ファックス(03-5961-5738)にてお申込ください。

挑発的なテキストと身体のぶつかり合いが、唯一無比の世界を作り上げる。



■練肉工房「風の対位法」

9/15(金)～9/17(日)19:00 9/18(月・祝)15:00 前売¥3500(学生¥2500) 当日¥3800

@麻布die pratz 問=04-7163-9263(練肉工房)

作=高柳誠 構成・演出=岡本肇 出演=上杉満代 笛田宇一郎 友貞京子 横田桂子 岡本肇 戸田裕大

「風のクロス」たちによって運び込まれる、太古からの死者たちの声、記憶。昨年の「月光の遠近法」に続く、新作、第二弾。多様なジャンルの両期的共同作業。

Q—今回の「風の対位法」公演は、昨年の「月光の遠近法」と連作なんですか。

A—そうですね。昨年3月に麻布die pratzで上演しました「月光の遠近法」は、お蔭様で好評で色んな雑誌や新聞にも批評が出ました。

現代詩の第一線活躍する詩人の高柳誠さんに書き下ろしてもらったのですが、今回の「風の対位法」はそれに続く第二弾で、まったく新たな素材、世界で刺激的で斬新なテキストを書いていただきました。

Q—どんな世界になるのですか。

A—「風のクロス」たちによって運び込まれる、太古からの死者たちの声、記憶が舞台上にくっきりと浮かび上がります。それは、カインとアベルの物語からギリシャ悲劇、そして現代にまで繋がる様々な骨肉の兄弟の争い、呪われた血族の、血塗られた歴史でもあるのですが、最近の世界情勢を見ましても、21世紀の現在も、戦争やテロを克服できないでいる私たちにとって、そうした象徴的な神話の世界、言葉は、痛

切でアクチュアルな課題を突き付けているはずで。

Q—出演者はどんなメンバーになりますか。

A—ギリシャ悲劇「コロノスのオイディプス」「アンティゴネー」、能「景清」などの世界を踏まえた、高柳さんの挑発的なテキストと真正面から取り組んでいくために、世界のダンスシーンで活躍する上杉満代さん、そして現代演劇の先端で意欲的に活躍してきた笛田宇一郎さん、友貞京子さん、横田桂子さん、戸田裕大さんなどの俳優陣が、強度と自在さのある<声>や身体表現を武器に積極的に入り結びます。私の演出の方も、皆さん力のある人達ばかりですが、手の内の技芸の寄せ集めのコラボレーションではつまらないので、なかなか大変ですが、一度その技芸を離れてゼロ地点に立ってみるような共同作業の場を設え、5月くらいから丁寧に稽古を重ねてきました。高柳さんの言葉に深く耳を澄ませ、<ことば>と<身体>の関係を根底から捉え返し、前回よりさらに斬新な演劇言語、時空が紡ぎ出せればと思っています。



■ヴァリアス・マダム・カプセル「左手にまつわる記憶」

9/19(火)19:30 9/20(水)16:00&19:30

前売¥2000 当日¥2500 問=048-253-9463

作=吉沢恵 出演=ヴァリアス・マダム・カプセル

@麻布die pratz

吉沢恵を中心としたグループ。ダンスや演劇など様々な経験を持つ出演者が、「左手」をキーワードに、それぞれの思い・記憶を身体で紡ぎ出します。

真夏の日差しをかわして稽古場に入り、リノリウムの床に

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

仰向けになった。高い天井に据えられたファンがぐるぐると回っている。私の脳味噌はゆるゆると眠りの中にある。やがて足音と話し声が重なり空間が脈を打ち出す頃、私たちのリハーサルは始まる。

コンテンポラリーダンス公演「左手にまつわる記憶」(9月19-20日 @麻布die pratz)に参加しようと思ったのは今年三月のことだ。企画・構成・振付をしている吉沢恵のバランス感覚が好きだったし、三年にわたる俳優修行の直後でフィクションはもういやという気持ちになっていた。

何を信じたかわからないけど、自分の体なら信じられると思った。それで踊ることになった。芝居づくりとの違いに初めは戸惑ったが今は芝居も踊りも近付く方法は同じだと考えている。肝心なのはその場に生じる物音をちゃんと聞くということだ。

踊り手達の動く摩擦音、スピーカーから流れる音楽、吉沢のダメ出しする声、時には雨音や犬が吠えるのまで全てを耳に入れる。そうしたら自分の動く間はおのずと決まる。そこで何を踊るかという「左手にまつわる記憶」である。

私は右利きだから、こうして文字を書くのも炊事洗濯するのも主として右手に拠っている。暮らすために必要なものはこの右手で掴み取ってきた。しかし手に入れる一方で失うことも多い。一つの望みを実現させようとしたら、他の可能性は切り捨てなければならない。

誰とともに生きるか、何を技として仕事をするか。幾つもの選択肢を前にしてためらいつつも、かけがえのない一つを選ぶ。それなのにしばしばつまづいては大切なものを手放してしまう。そうやって私という生命の軌跡から外れていったものが無数の影となって、この左手にちらちらと揺れているところを想像してみる。

それらの影は手中にしたはずだった私の人生であり、どこまでも付き随ってくる私の半身である。ところが舞台上に上がる東の間だけ、影は光影へと変わることを許され、私の体を覆っていく。光は闇、闇は光。右と左、生と死。私が舞台を愛するのは、まさに世界が反転するという刹那に感じるあの身震いを求めているからである。

全てが終わって影が沈黙に戻る時、この身が再び新しい地平に立っていることを信じた。生まれては死に、また生まれては死に、いつか肉体が朽ちるまで季節は巡っていく。野村悠子(「左手にまつわる記憶」出演)

アリスフェスティバル'06 10月の注目公演

煩惱と自虐ギャグ満載の 仏団ワールド。今回は日本の 演劇界を一刀両断!?



仏団観音びらき (from大阪)
「宗教演劇」
10月14日(土)～15日(日)



10/14(土)……………15:00 & 19:00
10/15(日)……………14:00 & 18:00

☆作・演出 = 本木香吏 ☆出演 = 峰口子、水津安希央、本木香吏、ゆであずき、萬知明(劇団ウエスト)、藤原新太郎(Team dark blue) 他

☆問合せ先 = Tel: 070-5167-0225

E-mail: kwannonbiraki@hotmail.com

Web: http://www.kwannonbiraki.com

去年に引き続きアリスフェスティバル登場の仏団観音びらき。前作ではダメ恋愛にハマる女達を自虐的かつコテコテに描いたが、今回は演劇界をその毒牙にかけるようだ。女優陣の体を張った体当たりの演技にも期待である。

→ 演劇の形を借りて百八つの煩惱と戦う戦国劇・仏団観音びらき。自虐的ナンセンスによる笑いはますますグレードアップし、ストレス解消に効験あらたかと疲れた女性たちから圧倒的支持を得る。大阪・心斎橋・心斎橋・心斎橋で満員盛況、勢い駆っての今回は、美内すずえ大先生「ガラスの仮面」のパロディと見せかけて実は?! 演劇界のダークサイドを鋭くえぐる問題作。さ

あ、貴方も、仏団の扉を開いて仏団菌を深く吸い込みませんか? 合掌。

日韓の刺激的な共同制作が 生み出した、世にも美しい 神話世界。

榴華殿+釜山演劇製作所
Dong-Nyok (from東京+釜山)
「Myth Busan-Tokyo MIX」
10月20日(金)～22日(日)



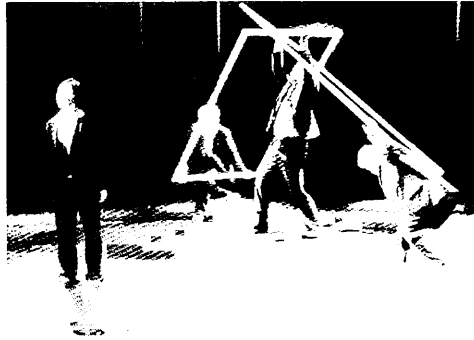
10/20(金)……………19:30
10/21(土)……………13:30 & 18:30
10/22(日)……………13:30 & 18:30

☆作・演出 = O Chi Un 川松理有 ☆出演 = 森田小夜子、佐野陽一、日野由絵、畑中友仁、Ha hyeon gwan、Yang jong ye、Kim Seil、Lee Ji Young Choi Yu Ri、Kim Ho Min 他

☆問合せ先 = Tel&Fax: 03-3354-7307

E-mail: info@rukaden.com

Web: http://www.rukaden.com



アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場 TINY ALICE より最新ニュース

2年前のアリスフェスティバルではアジアの俳優陣を迎え、それまでの耽美的な作風に加えて新しい展開を見せた榴華殿。今度は韓国の劇団ドンニョックとのコラボレーションを試みる。ドンニョックは活躍目覚ましい実力派。以前のアリスフェスティバルでは、「夢」をモチーフに実験的で美しい作品を作りあげた。

夢幻のイメージに形を与えることでは一二を争うこの2つの劇団が、どんな美しい神話を見せてくれるのか。

→ 涙を流すことのできない姉と、言葉を聞くことのできない妹。亡き母を訪ねて、途中離れ離れになる。が、黄泉の国で再びまみえた二人は、互いの旅で辿った道が初めから繋がっていたことを悟る。榴華殿(RUKADEN)は釜山のドンニョックを一ヶ月半、東京に招聘。長期にわたるワークショップ、共同脚本・共同演出によって新しい表現方法を模索し、物語の構築を試みる。互いの文化や思想を尊重しながらのコラボレーションは、海を隔てた二つの民族が、かつて神話で繋がっていたことの検証になるに違いない。

お得な共通券の情報や、全体のラインナップはティナイアリスホームページでもご覧になれます。

…http://www.tinyalice.net



左)釜山演劇製作所Dong-Nyok 右)榴華殿

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
http://www.tinyalice.net tokyo@tinyalice.ne.jp

麻布 die pratz

〒106-0044 港区東麻布1-26-6 2F T&F03-6545-1385

9/15(金)～9/18(月・祝) ■練肉工房

「風の対位法」 問=04-7163-9263(練肉工房)
☆作=高柳誠 ☆構成・演出=岡本章 ☆出演=上杉清代 笹田宇一郎 友貞京子 横田桂子 岡本章 戸田裕大 ◎「風のクロス」たちによって運び込まれる、太古からの死者たちの声、記憶。昨年の「月の光の遠近法」に続く、新作、第二弾。多様なジャンルの画期的共同作業。

9/19(火)&9/20(水) ■ヴァリアス・マダム・カプセル

「左手にまつわる記憶」 問=048-253-9463
☆作=吉沢恵 ☆出演=ヴァリアス、マダム・カプセル ◎吉沢恵を中心としたグループ。ダンスや演劇など様々な経験を積んだ出演者が、「左手」をキーワードに、それぞれの思い・記憶を身体で紡ぎ出します。

9/22(金)～9/24(日) ■テラ・アーツ・ファクトリー
「アンチゴネーノ血」 問=090-6020-7391(テラ・アーツ・ファクトリー) ☆原案・構成・演出=林英樹 ☆出演=滝康弘 吉永睦子 根岸佳南江 鎌井理代 井口香 山内直太 中内智子 他

◎アンチゴネーって何者? ハンドルネーム(匿名)の世界が、コトバの群れとなってスパイラルする。ANTIGONEと書いて反・子孫と解く、そのココロは?

9/26(火)～10/1(日) ■レッドフェイス

「悪女について(仮)」 問=03-5420-9334
☆原作=有吉佐和子 ☆訳=柳原利子 ☆演出=咲輝 ☆出演=咲輝 海老原智彦 三上潤 田中圭 他 ◎富小路公子という女実業家が謎の死をとげた。彼女を知る人々に、インタビューを申し込み、死の真相にせまろうとするのだが、次々と意外な事実が浮き彫りに…。

10/2(月)&10/3(火) ■86B210

「[color] colds laboratory of rabbits」 問=03-3370-5920 ☆作・演出=鈴木富美恵 ☆出演=井口桂子 鈴木富美恵 ◎絶叫と沈黙。はざままで硬直し粉砕するからディシリーズ。国内外で活動するダンス/パンギルドデュオ、86B210東京公演。

10/6(金)～10/9(月・祝) ■舞台芸術集団 地下空港
「絶望と光 2006」 問=090-9038-4258(舞台芸術集団 地下空港) ☆作・演出=伊藤晴朗 ☆出演=今村洋一 柴田貴輝 中林舞 小宮山知子 榎野萌 加藤千夏 他 ◎深夜のコンビニに運ばれてきた商品はなんと人間だった…。地下空港主宰・伊藤晴朗の衝撃の処女作「絶望と光」。初演より6年の時を経て今秋遂

に待望の再演決定!

神楽坂 die pratz

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

9/15(金)～9/17(日) ■幸内末帆+Facts

「Nutrition Facts」 問=090-8872-4370 前売所=JCDNダンスリザーブ http://dance.jcdn.org/ または nr6@hotmail.co.jp ☆振付・演出・出演=幸内末帆 ☆衣装=中西亜希子 ☆映像=山崎未奈 高瀬絵理 ☆出演=石原鏡江 市橋真理 田村真樹子 他 ◎新作「TULIP the FLOWER」と「バースデイズ」を映像と織り上げるカンパニー結成後初の単独公演。独自の振付手法とアプローチに注目。

9/20(水)～9/24(日) ■サスペンデッド
「clearly(クリアリー)」 問=070-5458-6641 E-mail suspended@hotmail.co.jp

☆作・演出=早船聡 ☆出演=柿丸美智恵 斎田智恵子 伊藤聡 佐藤隆平 佐野陽一 他 ◎東京上野。小さなデザイン会社に勤める人々のヒキコモゴモの人間模様。

9/29(金)～10/1(日) ■双身機関プロデュース

「カッコー」Sネット 問=052-433-7438
☆演出=高田恵篤 ☆出演=久川 佑木達也 岡田鉄目 松永英二 他 ◎薬漬けの毎日を送っている精神病患者達、そこへ一人の入院患者が入ってくる。彼は自分の罪を逃れる為に精神異常を装っている。病院側は彼を本物の精神異常者に仕立て上げ、電気ショック療法を行い…現代社会では誰しもが異常と云えるし誰しもが正常と云える。主人公の目には他の患者達が異常とは映らない。むしろ正常で、異常なのは管理している病院側だと映る。精神病とは、画一化された社会の価値観からはみ出た者を隔離し、抑圧を隠蔽する、優れた近代的な装置であると云えるのではないだろうか? この作品は、私たちを含むこうした世の中にささやかな「?」を提示するものである。

原稿を募集しています

CUT INでは、演劇、ダンスなどの舞台芸術を中心に美術や音楽、映像などジャンルを問わず実験的な表現をとりあげた原稿を随時募集しています。詳細は kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp (小笠原) までご一報ください。

schedule for September 2006

schedule for September 2006